

先週の礼拝メッセージ(2023年4月16日)

「人を恐れる男」 ヨハネによる福音書 19:1-16

ピラトはローマから遣わされたユダヤの総督です。彼のもとに、イエス様が裁判のために連れてこられました。今日の箇所を読んでみると、彼はイエス様が死刑になるような罪など何一つ犯していないということはわかっていました。ピラトは裁判官でもありましたが、無実を知っていながらイエス様を有罪とするのです。なぜこんなことが起こったのでしょうか。数週間前にもお話ししましたが、群衆が「十字架につけろ」と叫び続け、暴動へと発展しそうだったので、自分の立場を守るために、彼は無罪と分かっていたながら、イエス様を死刑に定めたのです。

彼はこうも言っています。「お前を釈放する権限も、十字架につける権限も、このわたしにあることを知らないのか。」(10節) 彼は、イエス様を無罪とする権限を持っていたのです。それなのに、イエス様を死刑に決めました。これは大きな罪です。ピラトは人を恐れたのです。自分が可愛かったのです。私たちはどうでしょう。特に日本人は、世間体と言って、人の評価を気にし、みんなと違うことへの恐れが人々の心にはあります。その恐れにとらわれると、伝道一つ取ってみても、なかなかできないということになりかねないのです。ピラトも人を恐れ、イエス様には罪がないと分かっており、自分にはイエス様を無罪とする権限があるにも関わらず、死刑と決めました。

もちろん、イエス様が十字架にかけられることは、神様の御計画でした。罪のないお方が私たち人間の罪をすべて負って、文字通り「呪われた者」となって死んでくださいました。そして墓に葬られ、3日目によみがえられました。この「福音」と言われる出来事は、世の始まる前から神様のご計画されていたことなのです。ではピラトは、その計画通りに動いただけなのでしょう。いいえ、神様は彼の性格や状況をすべてお用いなさっただけなのです。神様はピラトをはじめ人間をロボットにお造りになったわけではないのです。良いところも悪



いところもご存知で、神のご計画に中に入れてくださっているのです。どちらを選び取るかは、私たちに任せられているのです。ピラトの間違った選択すらも、神のご計画が進むために用いられたのです。だからと言って、彼は自分の決断の責任を取らなくて良いはずはありません。

ピラトの姿は、私たちにとって反面教師ではないでしょうか。

「人は恐怖の罠にかかる。主を信頼する者は高い所に置かれる。」(箴言 29:25)

私たちは人の目を気にしやすい者です。もちろん、人の目などどうでもいい、何をやってもいいということではありません。コリント1では「愛は礼を失せず」(13:5)とあります。しかし、人の目を気にして、恐れて、正しいことを行えないとしたら、それはピラトと同じことをしていることになります。人を恐れると、罠に陥るのです。本当に恐れなければならないのは神様です。神を恐れるということと、神を愛することは表裏一体です。神を信じるということは、神を恐れること、神に従うことです。

「だれでも神のことは守っているなら、その人のうちには神の愛が確かに全うされているのです。それによって、自分が神のうちにいることが分かります。」(ヨハネの手紙1:2:5)

私たちは神様を愛しています。だからこそ神様の目を気にする者でありたいのです。神様を恐れる者でありたいのです。

「信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをもともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」(ヘブル 12:2 新改訳)

私たちが人を恐れ人の目を気にしてしまう弱さを持っていることをご存知の主は、それらの罪を一身に負ってくださり、十字架の上で死んでくださいました。この恵みを受けた者として、主を喜び、主を恐れ、主に従う者とならせていただくことはありませんか。